

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

	長い程変えにくく、歴史の浅い程かえやすいもの					1						
両校共通	世代から世代へ自然に伝わる風習	16	11	10	7	16	3	41	30	29	1	
	何代にもわたり培われてきたもの	12	2	5	3	9	1	17	26	25	1	
	古くからある良いもの	3	4	2	3			10	13	8	5	
	集団の中に、うけつがれる望ましい個性	1		2	2		2	8	12	9	3	
	(無記入)	2	2		2	1	1	3	4	2	2	
	抜きさしならぬ実存をもって人間を包むもの		1						4	1	3	
	保守意識		1	1					2	2	2	
	着実な歴史がもたらした所産					1			3	3		
A校特有	虚像		2					1	2	2		
	別に何でもないが、それにより自分もそうであるような気持になるもの	/								2	2	
	自然にとけこんでゆくことのできる習慣									2	2	
	学んで知って楽しくなって力になるもの									1	1	
現在の在るべき姿を規制するのではなく、現在を未来に向けて向上させるもの									1			

- i) 本校特有の事項は、表現は(4)の場合と共通のムード的弱々しさを脱し切れず、しかも明らかに現実にこれと云って確信の持てる伝統の像は不在であることを反映したもので、奇妙な「なぞかけ」の文句みたいになっているが、その底には、誇りの場合と違い、積極的に追求し、創造しようという、(それより創造したいといった方がより当たっているかもしれないが)意欲がうかがわれることは、今後の生徒管理・指導の一つの方向を示すものとしてしっかり心にとめておきたいと思う。
- ii) A校特有の事項は、量的には決して多くはないが、形の上ではたまたま「なぞかけ」形式で本校と共通しているように見えるが、誇りの場合同様その格調の高さは、注目しなくてはならないと思う。
- iii) とにかく、A校の生徒は、はっきりと伝統の存在を意識し、本校の生徒は、それを真剣に求めている、(換言すれば、現在は未だ高次元の伝統は確認されていない)と言いうるように思う。

IV. 今後の計画

本調査は、最初にお断りしておいたように、未だ手をこけたばかりであり、データの量も、少く分析も厳しくはなく、不十分なことばかりであるが、我々としては、この研究を調査だけにおわらせるつもりは毛頭なく、むしろ本校の生徒に対しては、以上の各調査結果から洗い出された問題点を、ある面については生で示して生徒集会、あるいはH.R.のL.T.での討議の素材とし、また別の面(現在の本校の生徒の生活の中からは、少くとも上ってこなかった面)しかし、望ましいについては誘導的な調査を計画し、などして直接本校における誇りの確立、伝統の創造・伝承のエネルギーとしたい所存である。

なお、今回はA校との比較調査のみでも、これだけの問題点が発見できたのであるから、なお特長のある歴史の古い学校、また反対に、新進気鋭の若い学校などに御協力願って、他山の石(或は玉か?)を御提供願いたいと考えている。(戸苺・新村)

第8報 本校における「道徳」の実態Ⅱ

I. はじめに

現在、各中学校で行なわれている「道徳」は、まだ性格が定まっておらず、研究の余地が多い。適当な教授資料が少い為もあって、教師も生徒も途惑う場合がある。中には「道徳」の時間は自習であったり、H・R

の時間になったりしている学校もある。又教師の私見を鵜呑みにする生徒も出てくる。そのような実状の中で、文部省では、「期待される人間像」を前面に出し、小学校36、中学校21の徳目をかかげ、道徳指導書、参考書を出しかなり定型化した「道徳」を考えているようである。このことは昭和41年度道徳指導者講習会に

於ける文部省教科調査官の言からもうかがわれた。こうした現状に於いて、「道徳」の向かうべき方向はどちらか。巾のある思考力を伸ばすには定型化していると思われる資料に頼りきれない場合は、教師は何を支えとしたら良いか。生徒の全生活を含む「道徳」である為には何が必要であるのかなど問題は数多いが、以下の考察によって、いくらかでも指針が得られればと思うのである。尚今回は、保護者側の意見を主に考察してみたい。(調査対象は、中学1年生徒70名、2年生徒67名、高校1年生徒133名、中学1年保護者76名、2年保護者69名、昭和41年12月調査実施)

II. 調査結果

(1) 「道徳」の授業に対する生徒の態度

生徒が「道徳」の授業を好むかどうかは、その内容・指導方法等によるが積極的に好む生徒は少ない(1年36%, 2年27%)。一方積極的に忌避する生徒もまた少ない(1年4%, 2年10%)。このことは昨年の調査と殆んど変化ない。彼等の大部分(1年79%, 2年73%)は「道徳」の授業が意義あるものであることを認めているが、授業によっては反拗を感じるという者(1年30%, 2年27%)もいる。その理由としては、「先生の考えを生徒にうえつける」とか、「先生と自分の意見が異なる」、「理想ばかりが教えられる」などがあげられている。授業で学習したことが実行できない者(1年14%, 2年19%)は上記の理由をやはりあげているが、大部分は、完全にではないにしても実行している(1年84%, 2年81%)。このことも昨年の調査結果を再現している。よく実行する為には学習したことがら、生徒の中で内面化されなければならないが、実際には非常にわずかのことしか記憶に残っていない。前回も述べたように、「道徳」は家庭に於いて、社会に於いて生かされなければならないのであり、その為には家庭にも生徒が「道徳」を持ち帰り、定着させることが望ましいと思われる。しかし、実際は、半数以上の者(1年54%, 2年58%)は家庭で「道徳」で学んだことを話していない。理由としては、「話す必要がない」、「話すのがめんどうである」、「自

分だけわかっておればよい」、「家の人が聞いてくれない」などがあげられている。このことも昨年の調査と同様である。プリントなどの資料をよく用いた学級について家庭との連絡を調べてみてもほぼ同じである。すなわち、家の人にプリント等を見せる者(全て見せた者、時に見せた者を含め)49%、見せない者51%であり、同じ学級の保護者に同様の調査をすると、見た者45%、見ない者55%であった。見せた生徒と見た保護者のパーセンテージのずれは、保護者側の関心の薄さか生徒の見栄であろう。又、見ない保護者の中には、「道徳」の授業の存在さえ知らないという回答もあり、保護者側から求めて読む態度は少ない。

(2) 「道徳」に対する昇校生の反省

「道徳」は中学から高校へ移行するにつれ、生徒自身の中で発展、深化し、やがては倫社につながって行くのが望ましい。前回の高校1年生に対する調査では、「道徳は有意義であった」と答えた者が97名中7名であったが、今回同じ質問をしたところ133名中77名(58%)であった。昨年とは大差がある。これは昨年の1年生は倫社を学習しており、道徳と倫社との比較の上で立てた意見である。しかし、本年度の1年生は倫社をまだ学習しておらず素地のままの意見が反映したものと思われる。とはいえ、中学1、2年生のパーセンテージよりは下まわっている。又中学生にしたと同じ質問、「道徳で学んだことを日常生活で実行できるか」に対しては実行できると答えた者29%(中学1年は50%, 中学2年は39%), できないと答えた者38%(中学1年は14%, 中学2年は19%)で、やや差があり、それは時間の経過と比例して、「道徳」との結びつきが稀薄になるのか「道徳」に熱意がなかった為であろう。しかし躰という点で実行しているか、いないかを考えてみれば、家庭内の環境も大きな要因となるといえよう。

(3) 「道徳」への保護者の態度

先にも述べたように、「道徳」は家庭とも結びつく必要がある。そのためには、保護者が、どの程度「道徳」に関心があるかということを知っておくことも大切である。

表 1

		本校の道徳の授業を知っていますか			
		よく知っている	知らない	少しは知っている	無回答
中 1	5 人 (7%)	23人 (30%)	47人 (62%)	1人 (1%)	
中 2	8 (12%)	27 (39%)	33 (48%)	1 (1%)	

本校の「道徳」の内容を全然知らない保護者は表1にあるごとく、1年30%、2年39%である。このこと

については、保護者は生徒から伝え聞くより他に手段がなく、教師も特に保護者の意識を高める努力をして

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

いないことも原因である。

考察してみる。

次に、保護者は「道徳」をどのように考えているか

表 2

		「道徳」をどうあるべきだとお考えですか			
		戦前の修身に近いもの	戦前の修身とは別のもの	その他	無回答
中 1	31人 (41%)	40人 (53%)	4人 (5%)	1人	
中 2	22 (32)	40 (58)	6 (9)	1	

表2でわかるように、「道徳」は「修身」とは性質を異にすると大部分は考えているが、類似したものを考えている保護者もかなりある。

表 3

		「道徳」の必要度は			
		かなり必要	必要でない	必要	無回答
中 1	28 (37%)	3 (4%)	44 (58%)	1	
中 2	32 (46)	0	34 (50)	3 (4)	

そして、その必要性は殆んど全ての保護者が認めている。

表 4

		「道徳」に何を主に期待しますか			
		巾のある思考力	日常生活の躰	その他	無回答
中 1	31 (41%)	40 (53%)	3 (4%)	2 (3%)	
中 2	25 (36)	39 (57)	1 (1)	3 (4)	

又、表4からわかるように半数以上の保護者が、「道徳」に、実際に役立つ躰を期待している。しかし、「修身」と異なると考えているごとく、躰だけでなく、思考力の訓練も求められている。次に「道徳」が家庭の中にどの程度入っているか考察してみる。

表 5

		「道徳」に関して家庭で話題になったことがありますか		
		あ る	な い	無 回 答
中 1	48 (63%)	23 (30%)	5 (7%)	
中 2	44 (64)	23 (33)	2 (3)	

表5でわかるように、各学年60%以上の家庭で「道徳」が話題になったことがあるが、話題にならなかった家庭もかなりあることは注意せねばならない。

表 6

		「道徳」に関して生徒から話をきいたことがありますか			
		よく聞いた	聞かなかった	時には聞いた	無回答
中 1	10 (13%)	25 (33%)	40 (53%)	1 (1%)	
中 2	2 (3)	29 (42)	34 (49)	4 (6)	

表6では、「道徳」が生徒から家庭にどの程度入っているかの目安になる。学年が進むとパーセンテージが小さくなるのは、精神的発達に伴う一般的な現象

が表われているとも考えられるが、授業内容にもよるであろう。

表 7

		「道徳」で学んだことが今以上に家庭の中に入った方がよいですか		
		入った方がよい	入らない方がよい	無 回 答
中 1	73 (96%)	0	3 (4%)	
中 2	63 (92)	3 (4%)	3 (4)	

「道徳」が家庭の中で好意的に考えられていることが表7からわかる。しかし、生徒は必ずしも積極的に「道徳」を好んでいるわけではなく、この溝は問題である。教師は、生徒が進んで家庭に持ち帰れる内容を

持った授業をし、保護者は子供を非難、叱責するようなことは避け、共に考え合う雰囲気を作ることが必要であろう。

尚、この調査の記入保護者は下記のようなものである。

表 8

		この調査を記入された方は			
		父	母	そ の 他	無 回 答
中 1	23 (30%)	51 (67%)	2 (3%)	0	
中 2	27 (39)	41 (60)	0	1 (1%)	

Ⅲ. ま と め

「道徳」は、きめつけや、強制ではなく、「修身」からぬけ出し、新しい方向を見つけるには、必然的に民主的な教育でなければならない。その為には、広い教授資料と教師の十分な研修、よりよい指導方法が求められよう。又、文部省の指導書に満足せず、広い教材を求め折角充実して実施された授業は、各教師がその要点をまとめておいて、互に翌年度以降の生きた参考資料とし合うようにすることも大切なことであろう。この調査から、「道徳」は、学校に於ける授業時間だけでなく、家庭環境、社会環境の中で生かされるものであるから、家庭と一層深い、緊密な連絡が為されなくてはならないということが出て来た。その為には、まず、教師側と保護者側が子供をより良く伸ばして行く

ための素地を作って行くことが大切であろう。そうすることによって生徒は、教師、家庭を頼りに自らを成長させ、十分な思考力を持つことができるようになるであろう。

Ⅳ. 今後の方向

今回の調査により、生徒の「道徳」に対する反応は、昨年と殆んど変わりなく、解決すべき問題が変動したとも考えられない。又、家庭の関心は昨年よりも強くなっており好ましいが、今後は尚一層家庭との連絡を緊密にする必要がある。又、教師は、高校の倫社との連携を何らかの形で作り出すことが必要である。その為にも、適当な教材を求める努力をして行かねばならない。(盛 田)

第9報 中学の生徒会活動の育成

Ⅰ. はじめに

本校における中学生徒会活動は、中学生徒会と高校生徒会が相互に作用しあい、より高次の活動が期待される面もないわけではなかったが、総じて活動の独自性、自発性が失なわれるという結果に終ることが多かった。高校生徒会活動の指導面で、数年前からとくに

留意してきた事項は、その点の是正を実際の行事に即して行ないつつ、生徒の自主性を伸展させる点にあったが、それが中学生徒会活動の指導面には、まだ十分に滲透してはいなかった。そのため、中学生徒会活動の高校生徒会への依存度が強く、中学生なりのまとまった独自の活動を通して、社会性を身につける機会を失する嫌いがあり、積極的に自己を律してゆく態度を